

ドクター和のニッポン

# 臨終回巻



長尾和宏（ながお・かずひろ） 医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。近著「薬のやめどき」「痛くない死に方」はいずれもベストセラー。西国際大学客員教授。

延命治療をどこまで希望するか？自分が終末期になつたときの希望を、元気なうちに書面で明らかにしておくことを「リビングウイル」（以下、LW）といいます。

私は日本尊厳死協会の副理事として、休日返上でLWの普及・全国を行脚する日々です。LWにおいて、悩ましいのが遷延性（せんえんせい）意識障害になりました。

今日はミュージシャンの桑名正博さんの死

から5年（2012年10月26日没。享年59）ということで、この問題を考えています。

桑名さんが突然倒れたのは12年7月15日。

脳幹出血でした。脳幹

桑名さんはその日、明け方まで自宅で仕事をしていたところ、激しい頭痛に襲われ救急車を呼びました。病院に着いたとき、血圧は260まで上昇し呼吸停止状態。余命は最大3日と告げられました。

しかし、医者も驚くほど生き力で余命宣告を乗り越えます。かといって回復は不可能がります。

命力で余命宣告を乗り越えます。かといって回復は不可能がります。奥さんと妹さんは早く逝かせてほしいと言つたそうです。

が、前妻のアン・ルイスさんと娘の息子、美勇士（みゅうじ）さんは「奇跡があるのなら賭けてみたい」と対立したそうです。

LWはありませんでした。このように親族の意見が分かれた場合こそ、LWが尊重されます。本人の意思が明確であればもめ事も回避されるのです。

しかし、脳幹出血などでの突然倒れた場合はLWの尊重が難しいのも事実。どこからが終末期なのか、判断がつきにくいからです。前

遷延性意識障害とは、交通事故や脳幹出血などで、意思疎通ができずに寝たままの状態が3カ月以上継続していることをいいます。昔は植物状態と呼んでいました。

桑名さんは「奇跡があるのなら賭けてみたい」と対立したそうです。LWはありませんでした。このように親族の意見が分かれた場合こそ、LWが尊重されます。本人の意思が明確であればもめ事も回避されるのです。

しかし、脳幹出血などでの突然倒れた場合はLWの尊重が難しいのも事実。どこからが終末期なのか、判断がつきにくいからです。前

述のように3ヵ月意識が回復しないと遷延性意識障害と判断され、しかもLWの適用となるのは倒れてから6カ月以降と考えられています。

当初は奇跡を信じ、一日でも長く生きてほしいと望んだ美勇士さんも、父が倒れて2カ月後の週刊誌のインタビューで「巨額の医療費をこれ以上払えない。避けない不幸もある」と答えています。

結局、桑名さんの闘病は104日続きました。「この状態が2年も3年も続いたら…オヤジはそんな家族の気持ちをわかっています。本人の意思が明確であればもめ事も回避されるのです。

しかし、脳幹出血などでの突然倒れた場合はLWの尊重が難しいのも事実。どこからが終末期なのか、判断がつきにくいからです。前

やると意気込んでいたのに59歳で亡くなった桑名さん。実現していたら私も行っていたでしょう。「月のあかり」というバラードが好きでした。深夜の往診の帰路、あの歌を口ずさみながら見上げる月に無常を思う今日この頃です。

# 家族救う「終末期への遺言」

